

「長久手市戦後七十年記念誌」の発刊にあたって

長久手市は、核兵器の廃絶と恒久平和を願って、平成二十六年九月三十日に「長久手市非核平和都市宣言」を行いました。その翌年には、市役所本庁舎正面に記念碑を建立するとともに、市内の主要な公共施設に非核平和都市宣言パネルを設置しました。戦後から七十余年の時が経過しました。戦争体験者も高齢化し、働き盛りの大人であっても戦争の実際の有様を知らないため、戦争は縁のない遠い世界の話になりつつあります。戦争体験者が次の若い世代に戦争の悲惨さについて語り継いでいく時間は、それほど多く残されているとは考えられません。

そこで、本市では、本年五月三十一日に長久手市平和事業推進委員会を発足し、その活動の一つとして、この戦後七十年記念誌作成事業に着手しました。

市民を中心にすすめられた記念誌作成事業は、市民からの戦争体験談寄稿者、公募委員及び学識経験者で構成された委員会において、記念誌の構成に関する議論などを行い、この度の発刊となりました。この活動における市民のみなさんの取組は、高齢の委員が多いにもかかわらず、短期間で熱意を持って精力的に取り組んでいただけただけから、将来に向かって継続的に平和事業を充実させていくための原動力として不可欠であると痛感しました。

この委員会では今後、委員が自ら語り部となる「戦争体験を聞く集い」や「原爆写真パネル展」を開催する予定です。将来的には、戦争体験者への聞き取りや戦争に関する資料の収集などを継続していただき、記念誌の改訂版の発行を視野に入れた活動にも期待するところです。

行政である事務局は、あくまでも市民のサポート役であり、市民の意見を尊重して参りました。行政ができることには限界がありますので、市民の皆さんの御協力を得て、今後も平和事業の充実に目指してまいります。

是非、この冊子を一人でも多くの方に御覧いただき、平和について考えるきっかけにいただければ幸いです。

平成二十八年八月



長久手市長
市田一平

発刊に寄せて

〈小林元 アドバイザー〉

「どこかで戦争が始まるといいなあ。物が売れて景気がよくなって、おれたちも助かる」

今から八十年ほど前の昭和の初期の大人たちの会話です。日清・日露戦争から大正時代の第一次大戦のころ、日本は勝ち組でした。戦争は二年以内で終わり、相手から賠償金や領土の割譲を受け、日本は儲かったのです。しかも戦場となったのは日本国内ではなくて、朝鮮半島や中国の領土でした。

ところが昭和に入ると、世界大恐慌もあって、人々は長い不況に苦しみました。これが戦争待望の背景でした。そして戦争はまた始まりました。日本軍は中国本土に侵入し、北京、上海、武漢、広州などの重要拠点を占領しました。しかし中国は降伏せず、四年を経ても戦闘は終わらず、短期に日本が勝利という目論見は外れました。日本は国力を消耗し、食糧、衣類、燃料など生活に必要な物資は配給制になって、人々の生活水準は低下しました。この泥沼から抜け出そうと、日本は大きな賭けに出ました。中国を援助するアメリカ、イギリスなどを相手に、戦線を拡大しました。その結果は皆さんがご存知のとおりです。

それまで戦争は国外で行われたので、多くの日本人の間に、本当の意味での戦争体験がなかったのです。日本の本土は激しい空爆に晒され、沖縄では悲惨な地上戦、広島、長崎には原爆が投下されました。ここで大多数の日本人は、はじめて戦争のむごたらしさを実感しました。

それから七十年の歳月が過ぎ、戦争の悲惨さを知る人は、日毎に減っています。しかし現在でも世界の各地で戦闘が行われ、直接の体験者を新しく生み出しています。私たちは戦争体験の有無に拘らず、平和について常に考え、勉強することが大事です。貴重な体験を一つでも多く語らい記録して、記念誌を発行し、展示していただく意義は、この上もなく大切なことです。